

修士 (2021 年度)

日本における「反中感情」の高揚と 在日新華僑のナショナル・アイデンティティ ——若年層を対象として——

閻 書普 (エン ショフ)

1. 要旨

本論は反中感情が高揚している日本社会を背景とし、従来多様で複雑だと言われている在日新華僑のナショナル・アイデンティティを探求した。

近年、中米貿易戦争、コロナ禍、などにより、日本を含む世界中の反中感情が爆発した。日中の両国民を対象として言論 NPO が 2021 年に実施した第 17 回の共同世論調査と、アメリカのピュー・リサーチ・センターが 2020 年に発表した「attitude towards China」の結果から、日本人は中国に対する印象が良くなく、悪化する傾向も見られる。それ以外にも、雑誌、論文、ネットコメント及び現実空間のヘイトスピーチは数多く存在しており、日本における反中感情は確かに高まっていると言える。

しかし、日本の法務省によると、2021 年 6 月末時点では在日在留外国人数は 2,823,565 であり、その中でも、最も多いのは中国人 (745,411) であった。数多くの在日中国人は反中感情に満たされた日本社会において「嫌がれる」日々を過ごしており、日本社会への溶け込みは一層難しくなっていると言える状況で、本論は在日新華僑たちのナショナル・アイデンティティについて論じたい。

本論の中心概念であるネーションを分析するためのフレームとして、アンダーソン、ゲルナー及びスミス の三人の理論と、中国の学者が中国の独自のネーション観に対する考察を参考にした。また、ナショナル・アイデンティティについては、唐沢らが出した定義を整理した。

先行研究を踏まえ、実証的な研究手法を用い、2013 年以後来日した在日新華僑を対象とするインタビュー調査を行った。現在「反中」意識が高揚しつつある日本社会において、インタビューから得たデータから、在日新華僑のナショナル・アイデンティティを明らかにし、カテゴリー化することを試みた。その上で、「反中」と中国系移民のナショナル・アイデンティティの関係をまとめた。

結果として、在日新華僑のナショナル・アイデンティティを「母国志向型」、「移住国志向型」、「トランスナショナル志向型」、「個人志向型」という四つのタイプにカテゴリー化した。そして、移民として差別された経験のある対象者の語りから、日本社会の「反中感情」に対する実感とナショナル・アイデンティティの関係を「母国の立場」、「母国対立の立場」と「板挟み」に分類した。最後は在日新華僑のナショナル・アイデンティティの特徴を全体的には多様的で流動的で、その中に一部に極端性も見られると特徴づけた。

2. 論文の構成

第一章では、問題意識と研究背景、研究目的、調査対象・方法及び用語の定義について

述べる。

第二章では、本稿のフレームとして用いられている理論と概念を紹介する。国家をめぐる議論、古代中国と近代国家の形成を王らの中国の学者は出した理論を整理する。佐藤が整理したナショナリズムに関わる理論の分類（佐藤 2009）に基づき、その中から、近代主義の代表学者であるアンダーソンとゲルナーの理論と反近代主義の代表学者であるスミスの理論を紹介する。今の中国社会の現状と連結し、中国人を対象とするナショナリズム、ネーション観を分析する。

第三章は在日華人華僑のアイデンティティに関する先行研究を分析する。具体的には、シンガポールにおける華人、在日オールド・カマー、在日二世・三世など華人子孫と在日ニュー・カマーという4つのグループに分け、それぞれの群体のアイデンティティの形成、変容と形成過程における課題などを整理し、論述する。

第四章は本稿の調査概要である。本章では、まず、半構造化インタビューによる質的調査法を選択した理由と調査倫理を述べる。次に、質問項目のカテゴリーを説明し、仮質問と調査協力者の概要を紹介する。

第五章はインタビューから得たデータを整理したうえで、重要な部分をまとめ、分析し、結論と関わるキーワードを指摘する。具体的には「愛国心、国への誇り」、「帰属・愛着意識」、「中華文化への誇り」、「同胞意識」、「実際の行動」、「政策への態度」というナショナル・アイデンティティを測る尺度及び「差別・反中と関わる語り」という7つのテーマから行う。

第六章は調査から得たデータを分析し、まとめる。第五章で述べたデータに基づき、まずは在日新華僑のナショナル・アイデンティティを「母国志向型」、「移住国志向型」、「トランスナショナル志向型」、「個人志向型」という四つのタイプにカテゴリー化する。そして、移民として差別された経験のある対象者の語りから、差別された経験、日本社会の「反中感情」に対する実感とナショナル・アイデンティティの関係を整理したい。最後は本調査から得たデータから在日新華僑のナショナル・アイデンティティの特徴—多様性、流動性と極端性について論じる。

そして、終章となる第7章では、結論をまとめる。また、本研究の限界と今後の展望について言及する。

参考文献

言論NPO,2021,「第17回日中共同世論調査結果」(2021年11月20日取得,

<https://www.genron-npo.net/world/archives/11542-2.html>) .

日本出入国管理局,2021,「在留外国人統計 2021年6月末」(2022年1月2日取得,

https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00017.html) .

ピュー・リサーチ・センター,2021,Unfavorable Views of China Reach Historic Highs in Many Countries (2021年7月6日取得,

<https://www.pewresearch.org/global/2020/10/06/unfavorable-views-of-china-reach-historic-highs-in-many-countries/>)